

「身体」の諸相の探究

——J. バトラーにおける身体の再帰性と可傷性の関係に関する検討を通じて——

東京理科大学 長野慎一

【1. 目的】

本報告の目的は、J. バトラーの身体論を内在的に検討することを通じて、身体が、自らの選択によらずに置かれている社会的状況において、非暴力的に、自己の生を自ら再構成していく方法を、考察することである。

【2. 方法】

まずバトラーがいう身体概念に含まれる「語られる身体」「語る身体」「可傷的な身体」の意味を分析する。次に前二者の関係性を検討する。最後に「身体の可傷性」という視点が「語る身体」にもつ意義を検討する。

【3. 結果】

バトラーの身体概念は、①規範的言説の反覆引用（パフォーマティビティ）の結果として物質的同一性を付与される「語られる身体」（Butler 1990=1999, 2003）、②その結果に抗い別の反覆引用を誘発する「語る身体」（Butler 1997=2004, 2015=2018）、③物質的・社会的な相互依存に巻き込まれている中で、傷つけられる可能性を常に抱える「可傷的な身体」（Butler 2015=2018）という3つに分割できる。構築主義論者としてバトラーが位置づけられる場合、その身体概念は「語られる身体」として理解される傾向にある。だが、バトラーは「語る身体」が規範的言説の再編にもつ潜在力について指摘してきた。それは、規範が課す正統なそれではないにせよ、環境との関連において、自己の意味を感じ取り、環境を探索する点で、再帰的な身体の姿である。この身体像を前提にすれば、言説により同一性を付与される「語られる身体」は「語る身体」によって語り直されると言うべきである。「身体の可傷性」という視点が「語る身体」にもつ意義は必ずしも体系的に論じられていないが、バトラーの論からその道筋を素描することは可能である。可傷性は、選択によらずして居合わせることを迫られる諸身体が、傷を負わされる／負わせるという相互的關係にあることを意味する。ここから彼女が示唆するのは、傷を介して結びついている他者への哀悼を基調とする倫理である。身体に同一性を強いる社会という脈絡で言えば、己の生の存続のために、諸身体／その集合が、哀悼しえない存在として己の内から抹消した他者への感受性をいかに表現できるかとの課題に収斂する。

【4. 結論】

規範的言説が描く身体の姿は、身体みずからによって理解され、対抗的に表現される。身体が倫理的である条件は、喪失した他者に対する哀悼の念をもとに自己の輪郭を描き直すことに対して受容的であることだ。

文献

- Butler, J., 1990, *Gender Trouble*, Routledge. (1999, 竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』青土社.)
———, 1993, *Bodies That Matter*, Routledge.
———, 1997, *Excitable Speech*, Routledge. (2004, 竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店.)
———, 2015, *Notes toward a Performative Theory of Assembly*, Harvard University Press. (2018, 佐藤嘉幸・清水知子訳『アセンブリ』青土社.)